

現して史家を益する所尠くないであらう。(菊版圖版八、本文三〇〇頁、價五・〇〇、至文堂發行〔寺尾〕)

● 正明寺小志

本書は滋賀縣蒲生郡日野町松尾の古刹正明寺から、今秋十月同寺に於て嚴修せらるべき後水尾天皇二百五十回聖忌の記念として刊行したものである。當寺はもと聖徳太子の開創と稱せられた古刹であつたが織田信長の兵によつて堂宇を焼かれ寺領を沒收されて以來全く荒廢に歸し、其後徳川時代の初期に頼宮宗右衛門なる者の發起により永源寺の一絲和尚が再興に盡力し、後水尾上皇の御慮によつて御下賜金を忝ふして堂宇の造營に着手したが一絲は其の落成を見るに至らずして寂し、其後黄檗の龍溪和尚が住山するに至つて一層優渥なる上皇の恩恵を蒙つて伽藍は次第に完備し、第三代晦翁第五代寂門の時も皇室の外護によつて寺運益々揚つたのであつた。本書は主として此の一絲以來寂門に至る迄の寺運恢興の事歴を詳記してあつて、本縣の歴史に精通せらるる、前滋賀縣史編纂主任牧野信之助氏の特志により執筆されたものであ

る、附録には當寺所藏の一絲和尚の書狀三通並に當寺の建造物、寶物を列記してある(和裝七八頁、滋賀縣溪道元氏發行、非賣品)

● 菅居古文書 第一卷

河内豊田八幡宮の舊社家であつた菅居家は由緒ある舊家で多數の古文書類を所藏してゐるが、昨年當主正治氏が偶ま父祖の遺言して或る時期まで開封を禁じて置いた一箱を開封するに共に代々傳承せる古文書古記録入りの二個の唐櫃を開見したるに端を發して是れ等に依つて祖先の事蹟を明瞭ならしむべき必要を感じ之を京都帝國大學の西田直二郎博士に商り四月以降整理と調査に着手されたが、先般その整理を完了されたから、之を子孫に傳へるに共に國史研究の資料にもして刊行されたのである。その編纂は西田博士監修の下に神宮皇學館教授佐藤虎雄氏が専ら之に當られ、全部三卷より成り第一卷には古文書、引續き刊行さるべき第二卷には八幡宮に關する記録、日録、並に宗旨人別帳の類、第三卷には八幡宮並に神祇に關するもの、雜記録を收める由である。是等の古文書

古記録は昔時火災に罹つて焼失した残りに過ぎないといふ事であるが尙ほ徳川時代の初期以來のもの多數有つて豊田八幡宮の神事神役、社人社僧等に關する貴重な研究資料を學界に提供し、殊に朱印社領、社家の古格等に就ての社人・社僧との紛争に關するものは當時の神社の状況を知る上に少からず參考となるものである。(菊版假綴六三〇頁、圖版十六頁、京都菅居正治氏發行、非賣品)〔以上松野〕

● 開國文化

大阪朝日新聞社編

今我々の時代は世界と共にある時代である。我々は日本人であると共に世界人である。ロシアの革命、アメリカの資本主義が直に我々の問題となつてくる。我々はいかにしてかゝる關係に入りこんだのであらうか。開國といふ言葉がその原因を—或は手續を説明する。この言葉によつて意味された現象は恐らく我國に特有なものであつたかも知れない。我々はそこに示される日本歴史の特殊な姿に一種の微笑すらもなけたくなる。こもあれ開國によつて現代日本の形が豫定されたこもが明かであるこ

紹介

こもは聽てこの現象の理解が現代日本の理解への基礎的な手引となるであらう事を思はせる。朝日新聞社がさきに開國文化展覽會を開催し併せてこれに關する講演會を開いた理由も一はそこにあつたのであらう。その各講演が集められてこゝに再び世間によびかけて居る。一々の内容を紹介する暇はないが讀者はその中に政治經濟宗教藝術等諸般の姿に於ける開國文化の形相を見得るだらう。只こゝに用ひられた開國の語義は單に幕末維新の時期に限るものではなく、寧ろ近世初期泰西文化の波濤がこの島國日本の岸を濯ふに至つた時代以後を含めて居るこゝを注意して置きたい。(菊判四七七頁、價二・〇〇、大阪朝日新聞社發行)〔肥後〕

● 江戸時代之書目

杉浦 丘園著

雲泉山莊主人杉浦丘園氏は人も知る如く京都の好古家である。この度その所藏に係る江戸時代の書籍目録の各種を網羅して更にその目録を作り雲泉山莊誌卷之二にして世に聞はれたものが本書である。收むるこゝろ版本書籍目録八十一部寫本書籍目録五十二部に及び各解題を附

第十五卷 第一號 一三九